



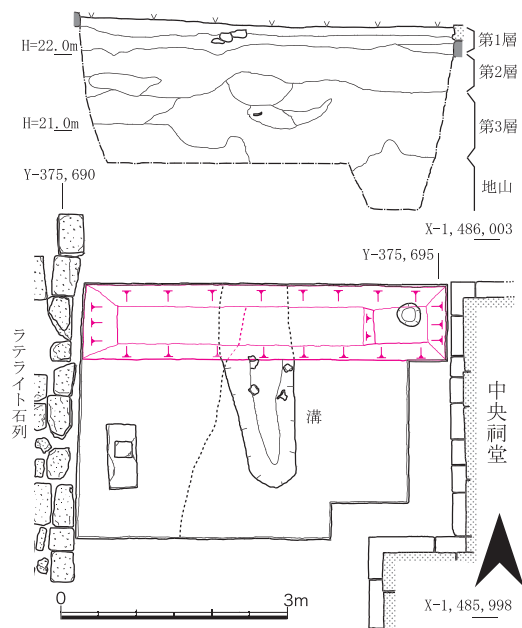


図29 第7次調査遺構平面図・北壁断面図 1:100

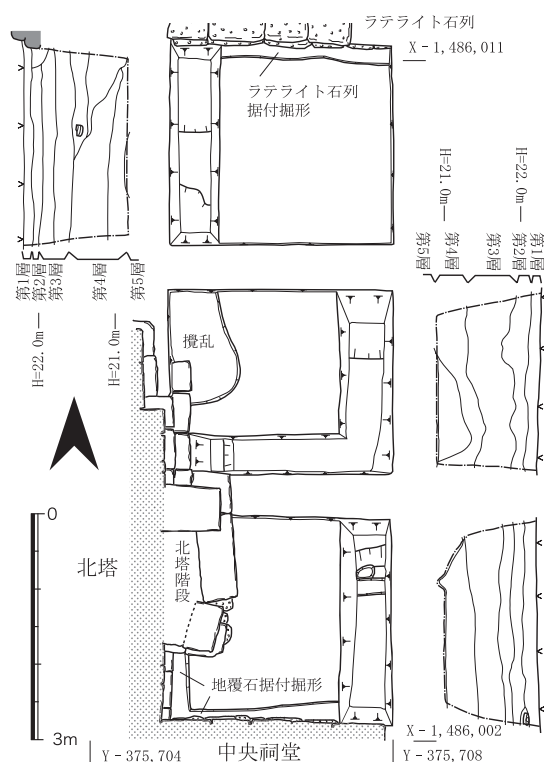


図30 第8次調査遺構平面図・東壁・西壁断面図 1:100

### 3 第8次調査

中央祠堂と北塔の接する部分から北に向かって東西3m、南北9mの調査区を設定した(Gトレンチ)。調査期間は2007年12月18日～22日である。

5層の主要な層位を確認した。第1層(深さ0～20cm)は表土である。第2層(20～50cm)は灰褐色のシルトである。第3層(50～80cm)は灰褐色のシルトに黄褐色のブロックが混じり、陶磁器が多く出土した。第4層(80～120cm)は暗灰色のシルトで、炭化物を若干含む。第5層(120cm以深)は黄褐色の粘土で、遺物をまったく含まず、地山と考えられる。第2層から第4層にかけて、14世紀頃の中国陶磁器がまんべんなく含まれていることから、これらは一連の整地土と考えられる。

中央祠堂・北塔の地覆石は第2層の上のっているが、北塔の東側の階段の石材(踏石)は表土(第1層)の上に直接のっており、地覆石を持たない。そのため、この階段は後の時代に付け足されたものと推測される。

中央祠堂・北塔の地覆石がのる整地土に含まれる遺物の年代から、少なくとも両建物の砂岩外装は14世紀以降に整えられたことが確認された。(林 正憲・石村 智)

### 4 まとめ

第7・8次の調査では、中央祠堂および北塔の周囲に

も掘込地業の痕跡は確認されず、また、これらの建物の地覆石がのる整地土の年代は14世紀頃と示され、ほぼ仏教テラスと同時期であることがわかった。これまで中央祠堂の改築と南北小塔の建立は仏教テラスの建立に先立つと考えられていたので、新しい知見である。なお、考古学的には、これまで西トップ寺院が9世紀にさかのぼるとする積極的な証拠はみつかっていない。

しかし、中央祠堂の前身建物は、ラテライトと紅色砂岩を石材とした一回り小さな建物と考えられ、その痕跡は現在の建物の内部に入れ子状になって存在していると想定される。もし、前身建物に伴う掘込地業が存在するのなら、その掘形ラインは現在の建物の内側にあることになる。プラサット・スープラ(11世紀末～12世紀前半)やバイヨン(12世紀末)では、日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)の調査によって掘込地業が確認されており、この工法はクメール建築で一般的に採用されていた可能性が高い。

つまり、西トップ寺院の年代および掘込地業を確認するには現在ある建物の内部を探るしかなく、それをおこなうのは解体修理の時をおいてほかにない。今後、解体修理をおこなう時には、同時に考古学的な発掘調査を実施し、両作業が連携してこれにあたることが重要になるだろう。(石村 智)